

## 高校教師の力量についての考察

—教師と生徒の人間関係作りと教師の協働—

永田 孝夫（経営学部准教授）

### (1) はじめに

私は1973年4月から愛知県の公立高校に勤務して主に日本史と現代社会を教え、そして2008年3月に定年退職を迎えた。この稿では公立高校での35年間に及ぶ私の個人的な経験をもとに、教師が高校の現場で必要とする力量について考察する。

期待される教師の資質能力に関しては、中央教育審議会や教育職員養成審議会の答申が基本的な視点を提出している。その中で、平成17年の中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」においては、「優れた教師」の条件として「①教職に対する強い情熱」、「②教育の専門家としての確かな力量」、「③総合的な人間力」の3つの要素が重要だとされた。3つの要素のうち、「②教育の専門家としての確かな力量」についての具体的な要素としてあげられたのは「子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力など」である。

平成17年のこの答申は「義務教育」に関する答申であるが、その「優れた教師」の3つの要素やその具体的な要素は高校教師にも通じるところがあると思われる。そこで、この稿ではそれらの要素のうち、「学習指導・授業作りの力」、「児童・生徒指導力」、「学級作りの力」の具体的な内容に関して高校を例として考察する。方法としては、私の個人的経験

を材料として分析することにする。したがってその結論を単純に一般化することはできないが、これからの高校における教育活動や大学における教師教育への提言の一つにはなりうらうと思う。

なおここで述べられる個人的な経験は、これからの高校の教育活動に役立つかどうかという観点で私が選んだ経験であり、したがって私の成功体験を中心にして考察している。だからといって、私の教育活動が成功体験ばかりだったわけではないことは当然で、むしろ失敗体験が多かったといえよう。失敗体験にもその価値はあるが、この稿では成功体験をもとに考察したことをおことわりしておきたい。

なお以下で考察の対象とする高校について簡単な説明をしておきたい。A高校は高校入学者数の増加を背景に1970年代末に新設された普通科の高校である。私が転勤した当時は教師たちが意欲的に教育活動に取り組んでいたが、学ぶ意欲の低い生徒もおり、就職希望者数が学年生徒数の約1/4をしめる状況であった。B高校も普通科の高校である。地域の伝統校であったが、地域に新設された他の高校などが大学進学に力を入れて生徒を集めるなかで、入学志望者数が減少して入学定員数ぎりぎりとなるなかで、やはり学ぶ意欲を失った生徒が一定数おり、就職希望者数がA高校と同じような割合を占めていた。C高校

は同じように普通科の高校である。この高校は地域の伝統校としてまた自由な校風で生徒の人気を集め、大学進学にも一定の成果をあげるいわゆる進学校である。

## (2) 学習指導・授業作りの力ー授業改善の取り組みー

私は1981年4月にA高校に転勤した。ここでは授業開始時刻に生徒が着席しない、授業中に生徒が私語やよそ事、居眠りをする、時には授業妨害をするなどの行為が見られ、授業が成立しにくい状況があった。そして授業内、授業外を問わず、教師と生徒との間にトラブルが発生することもあった。1985年に発行されたA高校の「年報」を見ると次のようなことが分かる。対象生徒280名の「授業に関する意識調査」が行われ、そこで授業が「よく分かる」は1%、「分かる」が30%、逆に「分からない」61%、「全く分からない」が7%で、68%の生徒は「分からない」、「全く分からない」と答えている。「分からない」と「全く分からない」生徒うち、「分からない」理由の第1位は「授業の内容が面白くないから」で35%である。「分からない」理由の第2位は「基礎力が不足しているから」24%、第3位は「授業に集中できないから」23%である。

(1)

私は以前から歴史の流れを理解させる授業を心掛けていたが、こうした状況の中でまず取り組んだのは授業改善であった。教科書の内容を生徒の実態に即して精選して再構成し、教育内容のポイントをしっかり決めて50分の授業に臨むようにした。

たとえば奈良時代の政治を扱う「政界の動揺」の項でみてみよう。この項での主な内容は2つで、それは「①政権が、長屋王→藤原四子→橘諸兄→藤原仲麻呂→道鏡と交代すること」、「②聖武天皇による鎮護国家のための大仏造立」である。この項を取り扱うにあたっては、権力の交代についての学習は生徒の頭を混乱させるので、私は授業のポイントを②の項目にしぼり、それに関連する限りで①を扱うことにした。

さらに生徒の実態にあわせて、できるだけ生徒の理解できるかみくだいた言葉で説明するようにして「分かる授業」を目指した。

さらに1997年以降勤務したB高校の日本史の授業で始めたのが、私が歴史上の人物になって会話するという「一人芝居」風の語りであった。

たとえば乙巳の変に至る中大兄皇子と中臣鎌足の蘇我氏打倒計画立案の話を会話風に仕立てて話すのである。「皇子、入鹿のこのごろの態度をどう思われますか。」→「しー、声大きいぞ、鎌足。入鹿は何でも一人で決めてしまう。独裁的で国のためにならん。」→「皇子、ここは入鹿を何とかしなければ。」→「鎌足、どうすればよいのだ。入鹿の勢力は強いぞ。」というように。

これは生徒には評判がよかった。ある年度末に生徒52名に対して行った「アンケート」の自由記述部分に次のような感想がある。「先生が歴史上の人物になった感じでその場面をわかりやすくせりふ調に言ってた」ので授業が分かりやすかったというものや、「先生みたいに、時には役者みたいになって歴史上の

人物を説明してほしい…。」などである。

B高校ではさらに授業プリントを作成し小テストや中テストを実施した。授業プリントは教科書内容の基本的事項を中心にして分かりやすくまとめ、重要事項を空欄にしたものである。生徒は授業中に私の説明を聞きながら、空欄を埋めてゆくことになる。そしてその授業プリントから出題する小テストを毎回、また定期考査毎の中間時点で中テストを行った。この方式は学習の仕方が身についていないB高校の生徒たちに合っていたようで評判はよかった。

年度末に行った「アンケート」によれば、プリントを使った授業に関して「とてもよい」39名、「まあよい」13名で、「あまりよくない」「全然よくない」は0名であった。「とてもよい」代表的な理由は、「教科書の内容がまとめてあって分かりやすい」「書く量が少ないので先生の話聞くことに集中できる」「プリントがあるのでテスト勉強がしやすい」というものであった。また小テストや中テストに関する自由記述にも「テスト勉強に役立つ」、「よく覚えられる」というものが多かった。

私の授業はどの高校においても基本的には一斉講義方式であったが、「分かる授業」を目標に生徒の実態に即した授業改善を行ってきた。また、適宜発問をしたり、史料を読ませたり、簡単に意見を発表させたりして常に生徒とのコミュニケーションをはかりながら授業をしてきた。生徒の実態に即して授業を改善する取り組みと、生徒とのコミュニケーションを大切にして授業を組み立てることは

いつの時代にも要請される重要な点だと思う。「優れた教師の条件」の1つである「学習指導・授業作りの力」というのも、まずは授業改善に取り組むという強い意志から始まる。生徒を前にして教師が分かってほしいという意識をどれだけ持ち続けることができるかが重要な分かれ道である。

### (3)「生徒指導力」－生徒を統制する力－

次に「児童・生徒指導力」について考察してみたい。

教師はよく「生徒指導力」を問われる。「○先生は指導力がある」「□□先生は指導力がない」などという場合の「指導力」というのは、たとえば授業中に静かに教師の説明を聞かせる力、生徒を一箇所に短時間に集合させる力など、要するに生徒の行動を統制する力量であり、生徒に指示して「生徒を動かす」力量である。生徒を統制し「生徒を動かす」「指導力」が教師にないと授業が成立せず学校教育は成り立たない。

この「指導力」を、先ほどのA高校「年報」掲載の「意識調査」を受けての生徒たちの「座談会」を材料に考えてみよう。毎日の授業に対する感想として、ある生徒は「先生が生徒になめられているような感じ」、また他の生徒は「おこったりしない先生だとどんどん騒いじゃう」と発言し、教師が「静かにしろ」と言っても生徒が聞かない状況があると指摘している。そして一方では「やたらこわい」先生で「わからん問題があるとげんこつがとんでくる」と「静かになる」との発言があり、

「こわい」先生の授業は聞いているようである。

またB高校での「アンケート」の自由記述部分に、私の授業に関して「話していると速攻注意されるので、授業に身が入りました。」とある。

こうした生徒の発言やアンケート記述を改めて読んでみると、「指導力」の内容の一つとして「おこって」生徒を統制する、「注意」して生徒を統制するという一面があることは明らかである。教師は「強制力」を働かせて生徒を統制下に置こうとする。しかしそれは生徒を静かにさせているだけで、授業が成立しているわけでは必ずしもない。同じA高校の「年報」に「意識調査」を受けての「生徒の意見・感想」があり、その中に「厳しい先生の授業が静かであると言っても、その授業に集中しているか」というとそうとも言い切れません。何も考えずにただ静かにしているだけというような状況が少なからずある」という記述がある。

授業そのものがすべて生徒にとって有意義だと認識されれば授業中の「強制力」は必要なくなるが、すべての授業を常に生徒全員を満足させる授業にするのは現実的には困難な場合があると思われるので、一定の「強制力」は必要になる。

以上、主として授業場面における「生徒指導力」を考察してきたが、教師は「生徒指導力」を授業場面だけでなく、他の場面でも発揮しなければならない。生徒も授業中はそれなりにおとなしくしているが、授業以外の場面では自分の気分によって授業中よりも自由

に、教師からみれば勝手な行動をしやすい。だから授業以外の場面での「生徒指導力」がその教師の本当の「生徒指導力」である。「生徒指導力」をできるだけ「強制力」に頼らずに発揮する方法はないのだろうか。すべての教師が「げんこつ」とばせるような教師になれるわけではない。

#### (4) 教師と生徒の人間関係作りー「生徒指導力」の基盤ー

ではどこでも通用する「生徒指導力」はどのようにして形成されるだろうか。次に、教師と生徒の人間関係作りに関する私の経験を考察してみよう。

前述のようにA高校では下手をすると授業が成立しなかった。そのころ私が出会ったのが、T. ゴードンの「教師学」の精神であった。教師が自分の感情に素直に一人一人の生徒の行動を整理し、生徒との間に受容的なコミュニケーションをはかろうとするものと私は理解した。その後、授業中に限らずできるだけ受容的な態度で生徒との関係を築こうとすることにしたのである。

そして私が生徒との間の人間関係をさらに改善しようと考えようになったのは、B高校においてであった。約10年ぶりに担任をすることになった私は、以前よりもメリハリのきいたホームルーム経営をしようと考えた。校則や社会的モラルの遵守を厳しく指導しながら、さまざまな場面で生徒一人一人に対して受容的な態度で接した。例えば私は、文化祭で、私の知る限りでは学校初めての演劇を、それも市民会館の舞台でやろうと提案した。

生徒は最初乗り気でなかったのですが、生徒と話し合いを繰り返し、休日に登校をしぶる生徒の家に電話して登校を促し、また準備する生徒たちに差し入れなどもして生徒の意欲を高めていった。その結果、私と生徒との間には少しずつ気持のつながりができていき、生徒同士の関係も良くなり、全員の生徒がやる気になった。そして最後は、みんなの力で、「ロミオとジュリエット」を演じきった。「初めは絶対いやだったが、やってみて本当に良かった。」という生徒の感想は、今でも心に残っている。

そして2007年度C高校で最後の担任をした時に、担任の2年生の生徒たちが終業式に間に合うようにメッセージカードを作ってくれた。そこには生徒たちの私に対する感謝の言葉がつづられており、これまでのどのカードよりも心のこもった内容で非常に感激した。そのカードの中から担任である私に関するメッセージをまとめると、「先生は話しやすかった」という感想と「授業が分かりやすい、面白い」という感想が多かった。

「先生は話しやすかった」という感想が多かった背景として考えられるのは、私が1年間を通じて積極的に生徒に話しかけ続けたことがあると思う。朝のSTから始まって授業後のST、清掃などのあらゆる場面で、生徒に私の方から意識的に話しかけ生徒の話聞くようにした。特におとなしくて自分からは話してこない生徒に積極的に話しかけた。

生徒に積極的に話しかけて受容的なコミュニケーションをとった結果、担任の私と話をすることに対する生徒の抵抗感は少なくなっ

たのであろう。教師の方から積極的に話しかけることは教師と生徒の人間関係作りには非常に重要な契機となる。こうした態度こそが生徒との人間関係作りの基本であろう。教師が生徒に話しかけ、生徒から教師に話しやすい雰囲気を作り上げることである。そして生徒との人間関係作りの結果、私の生徒への「指導力」は高まったと思う。

そう考えるのには次のような事情がある。高校の教師には生徒指導部に属して生徒指導を担当することを嫌う教師も多い。なぜなら、生徒指導部は生徒が問題行動を起こした場合や校則に触れた場合に直接生徒に指導する立場にあり、生徒を叱る、生徒に怒るなどの指導をしなければならない。こうした指導は生徒との関係を悪化させる可能性があるのも、教師の心には、避けたい、毅然とした指導は必要だが自分はやりたくないという思いが働く。学校には生徒指導部は嫌われ役という言い方もある。

C高校の最後の担任の時、私は生徒指導部の一員として担当学年の生徒指導の中心であった。場合によっては生徒からは恐れられ嫌われる役回りであった。そういう私に対して生徒が話しやすいという評価をしてくれたことは、生徒指導を「強制力」とは異なる方法で行うことができる可能性を示唆している。生徒に受容的に接して生徒との間に良好な人間関係を築くことは、生徒指導力を高めるはずである。学校現場では「生徒指導は教師と生徒との信頼関係がないとうまくいかない」とよく言われるが、生徒に信頼されていない教師が指導してもそれは実質的な指導にはな

らないからである。

以上をまとめてみると、教師と生徒の間に良好な人間関係ができてくれば、「強制力」をあまり使わなくても「生徒指導力」を発揮できることが分かった。

### (5) 「生徒指導力」を身につけることの難しさ

「生徒指導力」は一面では生徒に対する教師の「強制力」の働きであるが、他の一面では「教師と生徒の良好な人間関係」により生徒が従うという働き方もあると考えてきた。しかし「生徒指導力」のこの二面性は、「生徒指導力」を身につけることの難しさの原因となる。

「強制力」と「教師と生徒の良好な人間関係作り」の前提である受容的な接し方とのバランスが難しいのである。生徒に受容的に接する基本は生徒をありのまま受け入れることであるので、「強制力」とは相容れない。しかし先ほど述べたように、教師は必ず「生徒を動かす」一定の「強制力」をもたなければ学校で生徒への指導はできない。教師はさまざまな場面で、どこまで受け入れるか、どこから強制するかの判断を迫られる。このバランスを失すると、生徒は教師の指導に従わなくなる可能性がある。

生徒に受容的に接することが大切だと分かっているにもかかわらず、現実にはなかなか学校でそれが広がらない背景は、教師にとって「生徒を動かす」一定の「強制力」を失うかもしれないという恐怖があることである。

この点について、近藤邦夫は久富の文章を

引きながら、教師は「『権威』として子どもの前に立ちうる」ことが、教育活動の遂行に不可欠である」とし、しかし教師はその「権威」喪失の危機に日々さらされているという。そしてその危機に対してほとんどの教師を誘惑する対処が「威圧的になる」対処であるという。しかしこの対処は「子どもの怒りや苦痛」を招くことになるので、「権威として教師が子どもとの関係を築けるように、大人世代が大人世代共通の課題としてこれを担い、学校や教師に対して暖かな支援をすべき時期」だという。<sup>(2)</sup>

「威圧的」にならずに「『権威』として子どもの前に立ちうる」ためにはどうしたらよいだろうか。学校や教師に対する「暖かな支援」は今のところあまり期待できない。私の経験では、教師が一人の人間として生徒との間に信頼関係を築くことではないかと思う。教師と生徒を「教える人」と「教えられる人」に分けるのではなく、教師と生徒がともに学ぶ一人の人間という前提で人間関係を作っていくこと、そしてそのことによって築かれる信頼関係が「権威」の基礎になるのではないだろうか。

T. ゴードンの「教師学」では、教師自身が感情を持つ人間であることを自覚して生徒の行動を整理するところから「生徒理解」が始まるとしている。ここでもう一度、C高校における私の生徒指導部員としての指導を考えてみよう。この指導に際して私は生徒のために指導が必要だと信じて指導してきた。こうした信念なしに指導しても生徒は心からは従わないであろう。一人の人間として生徒に

接するということは、自分自身の感情や信念、いわば弱さも強さも生徒の目にみせながら指導することだと思う。

これからの教師にとって、受容的に接しながら「生徒を動かす」指導力が必要である。そのためには教師が生徒との間に良好な人間関係を築くことが大切だということ、また教師が一人の感情を持った人間として生徒に接しながら心の底から自分の行う指導に自信をもって指導することが大切だというのが私の考えである。

## (6)「ホームルーム作りの力」－教師と生徒および生徒同士の信頼関係－

以上のことをふまえて、最後に「ホームルーム作りの力」について考察する。

前述のメッセージカードからホームルームの評価に関するものを一部拾うと、「教室に来るのが楽しかった」という感想が多く、また「学校行事で団結したことや頑張ったこと」、「クラス行事ができたこと」、「勉強を頑張れたこと」がよかったという感想もあった。

「教室に来るのが楽しかった」という感想はホームルームの生徒たち同士が良好な人間関係を作り上げていた証拠であろう。この教室ではさまざまな場面で生徒同士が助け合い、1つの目標に向かって全員で努力する姿勢ができていった。私がホームルームの目標として掲げた「1人はみんなのために、みんなは1人のために」がうれしいことに機能したのである。当然その背景には、ホームルームの生徒たちが個人としても集団としても「自律」的な行動がとれる生徒だったことが

あるのだが。

こうした関係が成立するためには、担任がホームルームの目標を掲げる際に、生徒同士の人間関係作りに関するできるだけ具体的な目標を掲げることが大切である。また、生徒が盛り上がる学校行事を利用して、またホームルーム独自の行事を生徒とともに作ってゆくことにより、教師と生徒、生徒同士の人間関係を深めてゆくことが大切であろう。担任が生徒と一緒にあって雰囲気盛り上げることも生徒との人間関係作りには大切なことである。

私は特にホームルームの人間関係作りで大切だと思うことがある。それは「待つ」姿勢である。最後のC高校での最後の担任の時のことである。あまり清掃に熱心でない生徒がいた。「やろうよ」と言っても上の空で仲良しメンバーでおしゃべりをしている。しかしそこで怒るなどの強制力を働かせず、いつかやるようになるだろうという姿勢で待ち続けることにした。また体育大会や文化祭などのメンバー決めやホームルームの出し物決めについても、生徒が決めるのを待つ姿勢に徹した。今になって考えてみると、この「待つ」姿勢は教師にとってもとても気分がよい。イライラせずにすむ。

この生徒たちが卒業した後のことであるが、ある生徒が「先生は押しつけなかったよね」という感想を述べたことがある。私はこの生徒に対する期待、それも学習に励むようにという期待を持ち続けながら指導し続けたのだが、しかし強制的な言動は慎んだのである。この生徒は高校時代の私の期待を卒業後

も覚えていてくれたのである。いつか期待に応えてくれる可能性がある。

以上、生徒に話しかけ生徒の話を聞くだけでなく、私が生徒を指導しながら「待つ」姿勢に徹したことは、ホームルームにおける教師生徒間のそして生徒同士の間関係作りプラスに働いたと考えることができる。<sup>(3)</sup>

ホームルームにおける教師と生徒の人間関係、生徒同士の間関係がどちらも良好だということはすばらしいことで、こうした状況下では教育効果もあがる。実際このホームルームの学業成績は常に上位であった。それも成績の上位者が多く下位者が少ないという分布状態であった。お互いに頑張ろうという意識が働いていたようだ。またある生徒は、自ら室長としてホームルームの中心的な役割を担いたいと意欲をみせるようになった。こうして後期には室長・副室長の2人は投票をせずに自然に決まっていた。

### (7) ホームルーム担任の重要性と担任を支援する体制作り

以上考察してきた「学習指導・授業作りの力」、「生徒指導力」、「ホームルーム作りの力」の向上のためには、一人一人の教師の取り組みだけでなく学校全体の取り組みが必要になる。最後にこの点について、ホームルーム担任（以下担任と略す）の役割に関連して考察する。

高校においても担任の役割は重要になってきている。担任はホームルームの生徒一人一人の悩みや不安、変調などを察知しなければならない。担任はホームルームの生徒の行う

活動や行動についての最終責任者である。担任は学校や学年を代表して生徒を指導しながら、生徒の関係するあらゆる事柄に関して家庭や管理職・同僚教師との連絡・調整をはからなければならない。「不登校」や「いじめ」に対処する場合も担任の果たす役割は非常に大きい。

以上のように担任の仕事は「授業」と並んで高校において最も重要な仕事の一つだといえる。しかし担任のあり方に関しては課題が多い。その背景として、多くの教師がホームルーム経営を経験的なカンに頼って行っているということがある。もちろん経験的なカンは大切であるが、カンに頼ることは担任一人一人がいわば自分のやりたいようにホームルームを経営することになりやすい。いくつかのホームルームは非常にうまく経営されているが、他のホームルームはそうとはいえないということになりやすい。これからの学校では一定以上の水準のホームルーム経営が行われることが望ましいが、この点では多くの高校は課題を抱えているといえよう。

ではどうすべきか。一つは、各高校がそれぞれのホームルーム経営のあり方に関する統一した基準を作成することが考えられる。たとえば、各学年目標を達成するための具体的な行動計画を基礎に、各ホームルームが1年間に達成すべき具体的な目標とそのための具体的な活動計画を作成することなどが考えられる。

二つは担任に対する支援体制作りである。多くの高校では担任の仕事の重要さに比例した支援体制ができていない。この場合の支援

というのは、単なる仕事の分担ということではない。もちろん担任の仕事は多いので、仕事も分担する必要があるだろう。しかし必要なのはホームルーム経営上での目標達成のための支援である。たとえば担任が特定の生徒との人間関係作りに困難を感じた場合の支援、ホームルームの具体的な活動計画に対する支援、「不登校」や「いじめ」発見のための日常的な支援など、さまざまな支援が考えられる。

そのためには、担任に対する支援体制が学校全体に目に見える形で存在することが望ましい。担任が困った時にどこに相談したらよいかははっきりしていないのが現状である。担任が自分の困難や悩みを明らかにしてフランクに相談できる支援体制がほしいと思う。普通は学年主任が窓口になるのだろうが、各分掌主任との連携も必要になってくるだろう。

また別の問題もある。それは担任が自分の失敗や困難を相談することをためらいがちであることである。しかし現状をみると、ベテラン教師でさえホームルーム経営には困難を感じるが多くなっていると思われる。これからは担任から発信してホームルーム経営の水準をあげてゆくことが大切であろう。

そしてこうした体制作りの基盤には、教師同士の間の良好な人間関係が必要である。高校の現状からみると、各教科や各学年がそれぞれの立場を主張することも多い。そうした垣根を取り払うためにも教師の間での豊かなコミュニケーションが求められている。

## (9) まとめと課題

以上述べてきたことをまとめると次のようになろう。高校教師に求められる力量としては「学習指導・授業作りの力」に関しては、生徒の実情に即して授業改善に取り組む強い意志を持つことである。「生徒指導力」に関しては、生徒との間に良好な人間関係を作るために生徒に受容的に接して話しかけて生徒の話をよく聞くことである。「ホームルーム作りの力」に関しては、ホームルームの人間関係作りに関する目標をもってホームルーム経営を行うこと、決してあせらず「待つ」姿勢を堅持することにより生徒との間に良好な人間関係を作ることのほかに、学校行事やホームルームの独自行事などを通じてホームルームの雰囲気盛り上げてゆくことが必要である。

さらにホームルーム担任を支援する体制作りが重要であり、そのためには教師同士の人間関係を良好な関係にし、学校全体として取り組む姿勢を大切にすることが必要である。そしてこの観点は「学習指導・授業作り」、「生徒指導」に関しても生かされる必要がある。授業改善や「生徒指導」に関しても、教師同士が協力して学校全体として取り組むことが求められている。

一言で言えば、これからの高校教師は、生徒とのそして同僚教師との良い人間関係作りができる力量が大切だと思う。月並みな結論であるが人間関係作りができる人間力こそが求められているといえよう。

この点について今津孝次郎は「日本の学校では、教師の連携や協働が当然のこのよう

に前提とされてきたが、それは表面上のことであって、一步踏み込んでみると、様々な問題がひそんでいる」として、例えば「大規模な中学・高校では教師の連携がきわめて弱く、バラバラであるような場合もないわけではない」という。そして現在、従来の「『共同』文化が崩れたにもかかわらず、それに変わるべき『協働』文化が未だ幅広く定着していないなかで、同僚間教員連携が混乱している」状況になっているという。そして「協働」関係を確立するためには「学校と学校を取り巻く環境の両者の状況変化を分析しつつ、自分たちの教育実践を対象化して分析する作業」が重要な課題となっているとしている。<sup>(4)</sup>

これからは、教師一人一人が、自分のできる得意なところ、できない苦手なところを認識し、学校全体で協働する文化を創り上げて生徒を育ててゆくことが望まれている。

ではこのような力量を大学の教職課程で学ぶ学生に身につけさせるにはどうしたらよいか。人間力をつけるということは、オーソドックスに学問を学び人格を形成してゆくことになろう。その中で特にコミュニケーション能力を高めてゆくことが必要だと思われる。具体的には、模擬授業の実践などを経験しながら他の学生と協力して授業改善について積極的に学ぼうとする姿勢が望まれる。

とすると、今後の研究課題としては次のことが考えられる。授業構成法や授業構成法演習の授業のなかで、人格形成やコミュニケーション能力をつけるための授業方法の検討である。私は2010年度の授業の中で、模擬授業実施後にその授業の改善に関して学生同士に

話し合いを行わせてきた。学生同士の話し合いは、学生に授業改善に関する多面的な視点を認識させることには効果があったと思われる。しかし学生同士の話し合いであるがゆえに、また指導のいたらなさのゆえに、授業改善の内容に関する認識は不十分だったと思われる。今後は、学生同士に話し合いをさせながら、多面的な視点の認識だけでなく、授業改善の内容に関する認識を深めるための方策を考えてみたい。

また2年後には「教職実践演習」が開講されることになる。そこでは学生が教師として必要なコミュニケーション能力を身につけることができるような内容が求められる。具体的な教育内容を先進的な試みに学びながら開発してゆくことも課題となろう。

最後に、つたない考察に対するみなさまのご批判をお願いするとともに、私の個人的な経験をまとめる機会を与えてくださったことに感謝してこの稿を終えたい。

- 
- (1) 昭和59年度年報あぐい-第6号- 愛知県立阿久比高等学校校誌編集委員会 昭和60年 以下の本文中での「年報」はこれをさす。
  - (2) 近藤邦夫「『教育相談』の場から見た学校と教師」稲垣忠彦・久富善之編「日本の教師文化」東京大学出版会 1994年 所収
  - (3) この点に関しては次の文献が非常に参考になる。安積力也「教育の力『教育基本法』改訂下でもなお貫きうるもの」岩波ブックレット No715 2007年
  - (4) 今津孝次郎「学校の協働文化—日本と欧米の比較」藤田英典・志水宏吉編『変動社会のなかの教育・知識・権力 問題としての教育改革・教師・学校文化』2000年 所収